

小学校キャリア教育の研究動向の調査

—子どもの変容にもとづく研究の充実を展望して—

* 高 綱 睦 美

はじめに

1. 小学校におけるキャリア教育
2. 小学校におけるキャリア教育の研究動向
3. 小学校におけるキャリア教育研究の課題と展望

はじめに

1999年中央教育審議会（以下中教審）が「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」において、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育（中略）を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と指摘して以来、小学校でのキャリア教育が開始され20年以上が経過した。しかし、小学校でのキャリア教育は中学校・高等学校でのそれと比べて、実践の蓄積も少ない上、学術的な研究対象として取り上げられていることも少ない。J-Stageに採録されている論文検索では、タイトルに「キャリア」と共に「小学」が含まれる論文は18件であるが、「中学」は41件、「高校」または「高等学校」は92件である。このように、小学校におけるキャリア教育に関する学術的な研究は、一定の蓄積は見られるが中高に比べればまだ少なく、今後それを充実させるためには研究動向を概観し、どのような研究が望まれるかを明らかにする必要がある。

そこで本研究は、小学校キャリア教育の展開を振り返り、これを対象とした研究の動向を文献調査によって明らかにし、今後のキャリア教育の充実の観点から研究課題を明確化することを目的とする。そのため1では、まず1999年の中教審答申以降現在までの、小学校キャリア教育の展開を論じる。その上で2では、小学校キャリア教育を対象とした研究の動向を明らかにするために、学術論文や雑誌記事データベースより研究を抽出し、累計化する。これらを通して、3では、

小学校キャリア教育を対象とした研究として、今後取り組むべき課題を提示する。

1. 小学校におけるキャリア教育

日本において公的な用語として「キャリア教育」という言葉が最初に用いられたのは1999年に出された中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」が最初だといわれている（渡辺2008、藤田2014）。この答申の中で「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を（中略）小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と提唱されて以降、キャリア教育は全国の小学校において実践が取り組まれるようになっていた。¹

しかし、1999年の答申において、キャリア発達を考慮しながら小学校段階においてもキャリア教育を行う必要があることが指摘されたものの、「進路指導」という教育活動が教育課程に元々位置づいていた中学校や高等学校に比べ、小学校におけるキャリア教育が何を目標として行えばよいのかとらえづらいついという課題も抱えていた（児美川2007、渡辺2008、藤田2014）。その背景には、キャリア教育という言葉が使われるようになる以前、子どもたちのキャリア形成にかかわる教育活動の中核は、中学校・高等学校における「進路指導」であったことも一因として挙げられる。中学校や高等学校においては、戦後すぐに教育課程に位置付けられた「職業指導」の流れを受けた進路指導の活動の中で、適職診断や進路情報の提供、啓発的経験や進学先選択に関する相談活動などが行われていた。その内容が本来の目的とは外れて偏差値による出口指導に偏っていったという問題はあったものの、将来のこと

* 名古屋大学大学院学生

を考え、子どもたちの進路選択を含むキャリア形成の支援を教育活動として行う土壌は教育活動の中に育っていた。それに対し、小学校では進学先の選択を迫られることがほとんどなく、進路指導も教育課程に位置付けられていなかったため、将来の夢を描かせることなどはあったものの、キャリア形成にかかわる教育活動は総合的な学習の時間や特別活動、もしくは社会科や家庭科の一単元における実践が中心で、体系的な教育活動として位置づけられてこなかった。

また小学校段階からのキャリア教育の推進が打ち出された1999年前後は、社会的に若年者の早期離職やフリーターの急増が問題視され、答申においては小学校段階から必要であるとされたキャリア教育ではあるものの、活動のメインは若年者の雇用対策とされていた。これは1990年代以降日本企業が「正規雇用」を「非正規雇用」に置き換えていき、日本型雇用が再編されていった時期とも重なる。その影響からか若年者の早期離職やフリーターニート化、大卒者の失業などが問題となり、若者の職業意識をどのように高めるかなど若年者の支援に関心が向く中で、キャリア教育は小学校段階からやるのは早すぎるという意見も多く出された。見美川（2007）も「これまでは「進路指導」という概念さえ成立していなかった小学校段階の教育において、キャリア教育に取り組むというのは、いったいどういうことなのか。教師たちの意識においても戸惑いを隠せないところであろう」と述べているように、なかなか小学校においてキャリア教育を積極的に推進される状況にはいたらなかった。

このように、若年者の雇用対策として導入されたキャリア教育だが、その後教育基本法改訂などの過程を経て小学校段階からのキャリア教育が推進されるようになる。

2004年には、「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議 報告書」（文部科学省、2004）が出され、その中で「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」が提示された。このプログラムの枠組み（例）は、具体的に子どもたちがどのような行動がとれるようになればよいのか、あくまでも例示ではあるものの発達段階ごとに4領域8能力として詳細に示され、その後のキャリア教育実践の目指す姿として大きな影響を与えた。その詳細で具体的な例示がのちにキャリア教育の形骸化という問題を生むことになっていくが、キャリア教育を通して子どもたちにどのような力をつけていけばよいのか、またその力がつくことで子どもたちがどのような行動をできるようにしていくのかを示したことは、子どもたちの変容を促す実践を進め

る上で意義のあるものだったといえよう。

その後、2008年には小学校学習指導要領が改訂され、同時に「自分に気付き、未来を築くキャリア教育—小学校におけるキャリア教育推進のために—」（パンフレット）が出され、具体的に小学校におけるキャリア教育の実践が進められるようになっていた。

小学校においてはその後さらに2010年に「小学校キャリア教育の手引き」が刊行され、翌年には中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において基礎的・汎用的能力という言葉が登場する。この答申では、それまでもすると職業観・勤労観に重きをおいて実践されていたキャリア教育について、子どもたちがどのような姿になればよいかわかりづらかったという反省も踏まえつつ、価値観だけではなく、具体的な資質・能力の育成を意識した取り組みに変えていくことを目指していくことになった。

このような経緯をたどりながら推進されてきた小学校におけるキャリア教育であるが、その後2017年の学習指導要領が改訂において、ようやく学習指導要領において「キャリア教育」という言葉が明示され、小・中・高に共通する教育活動としてその推進を進めていくことが明示され今日に至っている。その後2020年にはキャリア・パスポートの導入も行われ、キャリア教育は、新しい学習指導要領の目指す姿を実現するための中核として位置づけられていった。しかし、その後予想もしていなかった急激な社会環境の変化の影響もあり、キャリア・パスポートの導入はなかなか進まず、またその活用を見据えた体系的なキャリア教育の実践を考える余裕がなかったこともあり、実践が思うように進められていない状況を耳にする。そこで、積極的な推進が求められている小学校キャリア教育について、学会誌や大学紀要論文などでどのように研究が進められているのか、概観していくこととする。

2. 小学校におけるキャリア教育の研究動向

1で概観したように、小学校におけるキャリア教育は1999年以降何段階かに分けて発展して取り組まれるようになっていった。そこで、本節では、小学校におけるキャリア教育の研究動向について分析する。

キャリア教育に関わる学会として、日本キャリア教育学会（旧：日本進路指導学会）がある。そこで当学会の学会誌に掲載された論文において小学校におけるキャリア教育の研究がどの程度行われていたのかを見ていくことにする。J-Stageのデータベースで検索した結果、日本キャリア教育学会とその前身である日本

進路指導学会が発行した学会誌において、小学校（小学生）・キャリア教育というキーワードで検索を行うと、検索結果は0件であった。そこで検索のキーワードを拡大し、「小学生」というキーワードのみで学会誌の掲載論文を検索した結果、4件の論文が該当した。しかし今回対象としている1999年以降の論文に限定すると2件のみが該当した（宮田2011, 岩崎1999）。これら該当論文はいずれも小学校におけるキャリア教育の実践を対象としているわけではなく、小学生のキャリア発達や進路意識を扱ったものであり、直接的に小学校におけるキャリア教育実践や、実践に伴う子どもたちのキャリア意識の変容を対象とした実践研究論文ではない。このように、キャリア教育に関する研究論文を主に掲載している学会誌であっても小学生・小学校を対象とした実践研究はほぼ見られなかったことは、小学校におけるキャリア教育の推進の一つの課題と指摘できよう。

次にキャリア教育の要と位置付けられた特別活動に関する研究を行っている特別活動学会の学会誌「特別活動学会紀要」においても、同様に「小学校」「キャリア」で検索した結果、該当する論文は37件ヒットしたが、内容を概観すると小学校におけるキャリア教育の実践を扱った研究は4件（安田2007, 宮田2018, 中野2019, 平宮・岩田2013）のみであった。安田（2007）の論文は、キャリア教育を実践する教師の子ども観をナラティブを軸に分析した研究であり、平宮・岩田（2013）の研究では小学生を対象とした「新ファンタジー・好きなところ」の実践研究を通して、子どもたちのリラックス感や豊かな感情体験がどのように高まるのか検証している。また「小学生」「キャリア」と検索した結果、先の4件で該当した論文のうちの1件のみ（宮田2018）が検索結果として該当した。この論文も小学校におけるキャリア教育で育成すべき能力について、学級活動によって育成した力とキャリア形成で育成した力の関係を因果モデルを用いて検証しており、どちらかといえばキャリア教育の実践を中心として子どもたちの変容をとらえたものではなく、変容をとらえるための枠組みやその効果を測定するための尺度作成をメインとした研究論文であった。

さらにキーワードを「児童」「キャリア」に変えてさらに検索すると先の4件の論文のうちの1件が該当し（中野2019）、その論文では、小学校2年生の生活科と学級活動における実践を通して子どもたちに「主体的に人のために働くとする意識」を育てることを目指した取り組みを行い、その効果を向社会性の得点を指標として測定が行われていた。ⁱⁱ

このように、キャリア教育の中核となる学術団体の学会誌を概観してもほとんど該当する論文が見当たらないため、さらに日本キャリア教育学会以外の学会誌について、J-Stageを用いてタイトルに「小学」「キャリア」が含まれるジャーナル検索を行った結果、18件の論文が示された。しかし内容を精査すると、実際に小学生や小学校におけるキャリア教育実践を対象とした研究論文は工学教育に掲載された論文2件（引地, 2012, 2021）と学校教育研究に掲載された1件（川端, 2001）のみという結果であった。引地の研究では、手作りロボット講座を通じて子どもたちのキャリア発達がどのように促されるのか検討したり、SDGsに基づいた授業を行うことで子どもたちの基礎的・汎用的能力がどのように変化するか検証していた。また川端の研究では小学校の総合的な学習の時間においてキャリア教育を位置づけ、それによって子どもたちに何を学ばせようとしているのかを明らかにしていたが、子どもたちの変容の詳細を追うことはできていない内容となっていた。

これらの状況からもわかるように、小学校におけるキャリア教育の実践やその成果を科学的に検証している研究論文はいまだ多くなく、実践は数多く取り組まれているもののそこの子どもの変容に関する知見を学術的に蓄積できるような状況にはなっていない。

そこで、次に学術誌ではなく実践報告としてはどの程度研究が進められているのかを明らかにするため、大学の紀要ではどの程度小学校におけるキャリア教育の研究がなされているのか、国立国会図書館のデータベース（雑誌記事索引）において「小学校」「キャリア教育」というキーワードがタイトルにある論文の検索を行った（2022年10月現在）。

その結果、255件の論文が該当したが、その中から学習指導要領の解説を行っているような記事や、キャリア教育の手引きの内容に関する総説などを除くと167件が該当した。大学の紀要・センター紀要に掲載された論文は13件のみであった。これら13件の論文の内容を検討すると、目指す姿や身につけさせたい資質・能力について提示されていた論文は検索結果として出てきた13論文のうち9件、実際の実践を取り上げたものは6件であった。また6件の実践を取り上げた研究論文のうち、子どもたちの変容を具体的に記述した論文は2件しかなく、2件においても変容が記載されていたとはいえ、子どもたちのワークシートなどの紹介にとどまっていた（図1）。

さらに今回詳細な分析は行えなかったが、255件の検索結果の内、雑誌児童心理の臨時増刊号に掲載され

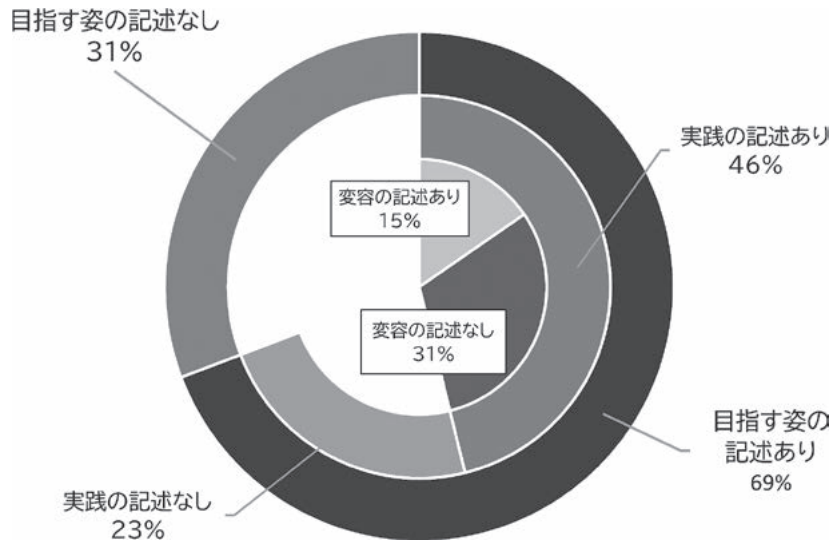


図1 論文の内容

た論文が28件、季刊進路指導に掲載された記事が58件を占めていた。

2008年に発行された児童心理の臨時増刊号62巻は「特集 夢・憧れ・生き方 小学校からのキャリア教育」というテーマで編集された雑誌であり、そこでは多くの実践論文が掲載されている。また、季刊進路指導においては、「実践小学校キャリア教育講座」や「小学校キャリア教育の実践と指導・助言」という連載企画が組まれている。後者の連載企画では、毎回小学校における実践が事例として紹介され、その実践に対する指導・助言を大学教員が行っている。それ以外にも教職研修総合特集や総合教育技術、初等教育資料などの教員向けの啓蒙的な教育雑誌に掲載された論文・記事が多く、実践について具体的な活動内容と対応させながら分析を行っている研究はまだ十分に行われていない。

3. 小学校におけるキャリア教育研究の課題と展望

今回の分析では、学会誌、大学紀要を中心に掲載された小学校におけるキャリア教育研究論文を対象として、実践内容の有無、育てたい資質・能力の提示、子どもたちの変容についての記述の有無の3つの観点から分析を行った。

その結果、実践内容が記載されている論文は数多く見られたが、それらの多くは教育啓蒙雑誌における取り組みであり、学会誌や大学紀要における実践研究論文においては、実践から小学校におけるキャリア教育

が何を目的として、どのような実践を行っていく必要があるのかを分析している論文はまだ数少ないという結果が示された。

このような現状になっている理由の一つには、キャリア教育が何か特定の活動を行えばよいという定型的な活動を目標としていないこともあるといえよう。キャリア教育の手引などにも示されているように、地域や学校の実態に合わせて子どもたちの資質・能力を高めていくことを目指して行われることが重要であるため、どの実践にも通用する共通の指標によって効果を測定することは困難である。また、文部科学省キャリア教育の手引きでも示されている指標の一つとして基礎的・汎用的能力が示されているものの、それらの能力が身についたかどうかを測定するための尺度もまだ多くなく、すべての学校で活用するには至っていない。こうした課題については、文部科学省もすでに指摘しており、「キャリア教育のアウトカム評価指標の開発に関する調査研究」成果パンフレット（藤田他2019）においてもどのようにキャリア教育をアウトカム指標によって評価していけばよいのか、海外の事例も取り上げながら研究結果が紹介されている。

中学校や高等学校におけるキャリア教育実践については、進路選択やその後の進学先・就職先への適応など、実践の効果の有無を測定するための指標が比較的設計しやすいが、小学校におけるキャリア教育の実践の場合、どうしてもその効果について何をもちとらえるのか基準を定めにくい部分があることは事実である。しかし、子どもたちにどのような姿になってほし

いのか、またどのような資質・能力を身につけさせることで、自らの将来のキャリアを築いていくための力を育てようとしているのか、そこを明確にして実践に取り組んでいかなければ、せっかくの体系的な実践も広がりづらくなってしまふだろう。逆に言えば、こうした実践の内容と、子どもたちのどのような力の変容がかかわりあっているのかを明確にした実践を積み上げていくことによって、多様な活動方法が考えられる小学校のキャリア教育の中の核となる部分を導き出していくことができるのではないだろうか。

すでに行われている実践の多くは、子どもたちが社会に出たときに主体的に自らのキャリアを形成し、幸せな人生を歩んでいくための力の育成を目指して行われていることは確かであろう。子どもたち一人ひとり異なる人生を歩んでいくからこそ、また遠い先のキャリアがどうなっていくのか、社会の変化も含め予測しづらい状況の中で行うキャリア教育だからこそ、一つずつの実践が子どもたちの力をどのように育て、その力がつくことで子どもたちの成長や発達がどのように変化していったのか、プラスの部分だけではなくマイナスの側面も含めて丁寧に検証していくことが求められる。

今回の分析では、学会誌レベルの研究論文としては小学校におけるキャリア教育研究がまだあまりされておらず、実践論文として書かれた多くの研究論文では子どもたちの変容を十分追えていないということが明らかになった。今後さらに小学校段階からのキャリア教育実践を進めていくためには、子どもたちの変容ま

でをとらえた実践研究を行っていくことが必要になってくるだろう。また検索結果として示された研究論文の発行年別の件数を示したデータからは、答申や手引きが出される前後には研究論文が多くみられるものの、それ以外の年度になると研究論文の数が減少する傾向があることも明らかになった。（図2）

論文が増加した2005年は文部科学省「キャリア教育に関する総合的調査研究者会議」報告書が出された翌年でもあり、それを受けて急激に論文が増えたことがグラフから読み取れる。また2008年1月には中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が出され、小・中・高等学校におけるキャリア教育の概要が示された影響を受けて、前節で取り上げた児童心理臨時増刊号などで特集が組まれたり実践が増加したりしたと考えられる。また2020年はキャリア・パスポートが導入された年であり、研究論文が増加する節目には何かしらの方針が出される節目が重なっている。ただし、そうした節目の年をきっかけにキャリア教育が増加、そして継続的に実践・研究されていくのではなく、節目節目に急増してはその後減少していることが大きな課題であろう。しかも、全体的な傾向としても減少傾向にあり、特に2015年以降は2020年を除いては1桁しかない。小学校におけるキャリア教育を単なる一時的なイベントに終わらせず、子どもたちのよりよい人生を築く力の育成として実践していくためには、改めてキャリア教育の目的を理解したうえで、子どもたちの変容を見据えた実践を行うとともに、教

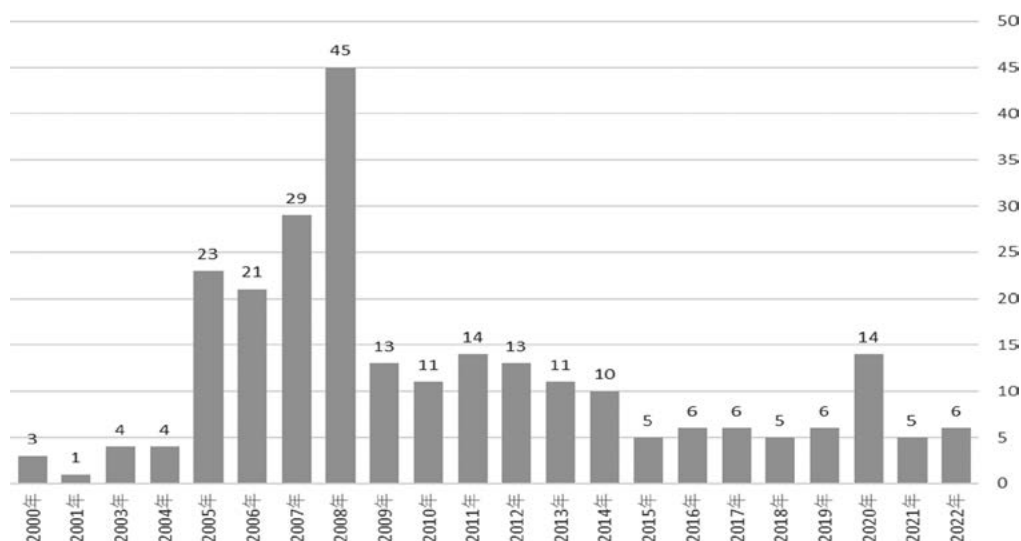


図2 小学校×キャリア教育に関する論文数の推移（国立国会図書館サーチ）255件

師だけがその実践の負担を負いすぎず、地域や保護者、外部の研究者などとも連携を取りながら、持続可能な形で長期的な変容を見据えた取り組みをしていくことができるよう進めていくことが期待される。

今回は、国立国会図書館のデータベースとJ-Stageを用いて分析を行ったが、今後は国教育政策研究所サーチに収容されている各都道府県・市町村教育委員会のセンター紀要までを対象として、さらに実践研究論文において子どもたちの変容までとらえている実践研究の動向を分析していきたい。

〔引用・参考文献〕

吉武聡一・西山久子「小学校におけるキャリア教育の推進に関する動向と実践上の課題」福岡教育大学紀要, 第60号 第4分冊, pp.191-202, 2011

浅野信彦・伊藤友美「小学校におけるキャリア教育の現状と課題—実践からの示唆」『教育学部紀要』文政大学教育学部 第43集, pp.13-23, 2011

神谷孝男「小学校段階からのキャリア教育—「生きる力」と「夢」をはぐくむ教育」愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 第9号, pp.17-26, 2006

中越敏文「小学校におけるキャリア教育の必要性に関わる研究」愛知教育大学研究報告, 58 教育科学編, pp.179-187, 2009

人見佳代子・赤塚朋子「キャリア教育の視点を取り入れた小学校家庭科構想」宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 第31号, 2008

大岸啓子・前角和宏「小学校「特別の教科 道徳」におけるキャリア教育：自己決定能力を高める」神戸海星女子学院大学教育研究, 2017

中西仁「キャリア教育の視点を取り入れた小学校社会科の授業—5年生産業学習を事例として」京都学園大学人間文化学会紀要, 18号, pp.31-47, 2006

藤本仁「小学校特別活動におけるキャリア教育の重要性：キャリア・パスポートの活用」青山学院大学教職研究, 7号, pp.207-231, 2021

花坂歩・衛藤俊明・釘宮泰代「グローバル人材の育成を目指す小規模小学校の挑戦：地域の教育資源を活用したキャリア教育実践の報告」大分大学高等教育開発センター紀要, 13, pp.157-166, 2021

小鉢拓・畑中大路「小学校特別活動におけるキャリア教育の実践に関する一考察：「キャリアプランニング能力」の育成に焦点を当てて」長崎大学教育学部教育実践研究紀要, 18, pp.315-324, 2019

川端邦彦「小学校の総合的な学習の時間におけるキャリア教育の有効性に関する考察」鳴門教育大学学

校教育研究紀要, 20, pp.139-145, 2001

桑原広治・夏目朋之「短期大学における小学校教員の育て方：カリキュラム・マネジメントと生涯学習社会を志向するキャリア教育の推進を通して」佐賀女子短期大学研究紀要佐賀女子短期大学編, 54, pp.101-116, 2020

児美川孝一郎「権利としてのキャリア教育」明石書店, p.25, 2007

中野真悟, 「人のために働こうとする児童を育てるキャリア教育,」日本特別活動学会紀要, 27巻, pp.59-68, 2019

小池翔太「デジタル時代の働き方の変化を踏まえた小学校におけるキャリア教育のプログラム開発の試み：職業の変化に着目したブログ記事制作の体験を通して」授業実践開発研究, 7, pp.43-50, 2014

宮田延実「小学生の希望職業からみた職業的発達の検討」キャリア教育研究, 30巻, 2号, pp.53-60, 2011

岩崎久美子「小学生の進路意識と学業成績に及ぼす心理的要因：原因帰属と自尊感情」進路指導研究, 19巻1号, pp.26-34, 1999

宮田延実, 「小学生のキャリア形成を促進する特別活動の役割」日本特別活動学会紀要26巻, pp.39-47, 2018

引地力男・精松伸二・鎌田清孝・田中智樹「キャリア教育を目指した離島小学校へのものづくり教育支援」, 工学教育, 60-6, pp.150-155, 2012

引地力男「小学生のためのSDGs達成とキャリア教育を目指した教材開発」工学教育, 69巻, 4号, pp.2-7, 2021

藤田晃之・石嶺ちづる・京免徹雄・柴沼俊輔「キャリア教育のアウトカム評価指標の開発に関する調査研究」研究成果パンフレット, 2019

藤田晃之「キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—」実業之日本社, 2014

文部科学省「小学校キャリア教育の手引き（改訂版）」2022

渡辺三枝子「キャリア教育—自立していく子どもたち」, 東京書籍, 2008

吉澤勝「小学校における進路指導の構想」埼玉県立南教育センター研究紀要, 第11巻, pp.54-57, 1998

〔注〕

ⁱ キャリア教育以前の進路指導においても中高が中心であったが、一部には小学校の実践も見られる（例えば、吉澤1998）が、1999年中教審の提唱を機

に、「キャリア教育」という名称が用いられて実践されるようになった。

- ii 特別活動学会はキャリアに関連する限定がない。小学生だけで検索すると、キャリア教育に関係の

ない論文が多数ヒットする。そのため、キャリア教育学会（進路教育学会）を対象とした「小学生」というキーワードのみの検索は、本研究の目的のために採用することはできない

Research Trends of Career Education in Elementary School: Perspectives for Enhancing Research Based on Children's Change

Mutsumi TAKATSUNA*

In its report of 1999, the Japanese government's Central Council for Education suggested that career education should be implemented from elementary school stage according to an individual's developmental stages. However, career education in elementary schools has not been promoted to the degree that it has in junior and senior high schools, and thus has not been the subject of much academic research.

The purpose of this study is to review the development of elementary school career education, to identify trends in research on this subject through a literature review, and to clarify research issues that might enhance future career education efforts.

First, a discussion of the development of elementary school career education since the 1999 report to the present was undertaken. To identify trends in research focused on elementary school career education, previous academic studies will be discussed and classified.

This research found very few studies on career education in elementary schools been published in Japanese academic journals. A search of the Japan Association for Career Education (formerly the Japan Association for Career Guidance) using the keywords elementary school (elementary school) and career education yielded zero results. Next, we searched for “elementary school students” and “career” in the journal of the Society for Special Activities, which conducts research on special activities considered the cornerstone of career education to find only one search result. However, this did not explore any notion of children's transformation because of this practice. Furthermore, a search for articles using the key words “elementary school” and “career” in titles yielded eighteen articles, although a close examination of the contents revealed that only two articles were published in *Engineering Education* and one article in *School Education Research* related to career education practices for elementary schools.

In addition, only thirteen cases with this topic have been published in university bulletins. Categorizing showed that only six papers report or introduce the practices, and only two papers even identify the effects of learning based on the analysis of the practices. In other words, few studies have clarified the effectiveness of career education in any concrete way.

Even if we broaden the scope to some general education journals other than academic journals, we can find many articles and reports of practice that discuss the significance and potential of career education, but still, find very few studies that clarify the effects of practice-based learning.

Considering the above, an increase in practical and empirical research targeting elementary school career education is desirable. There is a need for research that will identify how learners learn as well as how the outcomes of career education are relevant to a child's future.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

